治承の初風たゝく故に花ちる海こゝろ
なおもをしみ伏見より里まで送り申もと
雲をゝしひとうれ出るこゝろ毋のゝ
秋の野山の美しきをみるすみやかに
なりて青の身をむすぶしくれるものとあ
りとり乘捨こゝにて後橋をよりて
名をゝ指自稱のほとりをゝるうち
宇治山をゝ越ゝ毋こゝを呼て

一ことゝ先紀出るを押の〳〵孫之とゝら
わてゝらの京都りゝ孫をまえつゝふ
ゝゝゝゝうすゝみくしむ

麦魅翁

あ政七年庚申
如月

百頭

清ゝゝゝ月や梅ゝ苔ゝゝ掉ゝゝ　梅通

蘭ゝ信ゝのいゝゝゝゝゝ夢　知風

孔ゝゝ蛮ゝあゝ彼ゝゝゝゝ　菫子

毎ゝ形ゝ多ゝ彩ゝ貴ゝゝ　通

形ゝゝゝ松の紫かゝもゝゝゝ　風

ゝゝ西日手　白ゝ菜玉　子

寸詰まうつ教は綱り寄　通

咲人ハ鼻如は紙紙ばくさ雪　風

ウ

石櫃ゥ中柿を　すゝ梅ゝり　子

ばくまん紙ゝ珠数の結　通

ゝばりとつゝ地ゝもひとむつし　風

分赤の方も貧ゝ　子

おらい人はまんまゝ如果一尼通　通

ぬうりかは　ゝす素竹引り　風

冥婚をあてゝ雲切る古生物　子

みうゝすゝゝ綱綿は蓋　通

月は江小西社嵯ゝひり　風

袷のうゝり義ね打　子

寄稿の赤は身ゝむ板　通

こはれかゝて　ゝ寄結今　風

花咲てゝゝらく休むさらし稿　子

古敷りて寒ゝ鉛のゝり涙　通

数つもり一日の暮かり　風

乱れ髪さすらへて行く末は　子

留主は居ても帰らぬ人の　通

手井つゝ　ふるをいつかる　風

言ふ迄もなき世の中　子

言は杖うるく猫も居らず　通

風の音の乱れかち合ふ　風

砂はさらさら居風呂の底　子

力瘤見せぬ湖の目分級　通

古をなを埋る宮ゆ大ゆき　風

押入は隠る狸も餌合ふ　子

意と言つても叩く裏の戸　通

色行く月を知て情夫好き　風

彼岸は餅を頼入れてなく　子

いつ迄も春は桜は散れ　通

楽しく内陸と言らく　風

年始に形ハかりつくゝ云々つけ　子

始て注らす　箸のまちうひ　通

烟草の注意ふう歯のあいまに紙　風

鼻注まんてもまたいひきかく　子

除夜の酒の進り成ものあれ例あて　通

余程を面る　提灯　風

親類のあつて茶果する不ふり　子

後掛うけて　お猪口　通

退注りうちの碗を接海そし　風

月の備ち　新らしき　升　子

初もを元ちう　ゆる　所　通

うそうと城る　姑田の　風

三月　日　南りて元ちハい　猪を打られて　通

酒もう自ちを　矢脊の富風呂　子

を拭うつて　味汁の　むきく　風

崖　波て　面も城ちまきき　通

子をとらへ捕まへ抱きも如夫連　子
そこ迄たる時元そしく絵る　風
蔓曽からあるす歩きうれしき　通
五合三郎冥くもあるあと　子
小一把も附おつかつ燃下る　風
鼠をあるし紀　松の仕事場　通
大枝の赤宮の撞をそあ海　子
ゑをあてゝ踏ひらかり　風

三ウ

をそうあれ交交に見もいきまして　通
お茶つゝ中くに繋れ紀を　子
地すを引けば縮を知らい油　風
かをあるを浴の小とき　通
一ヶ茶はあるさいを寄近札　子
遠ほと松見るを屋の照　風
袋行ひの来をそあるとも　通
義好く猫うれも出する　子

いくつらも強きかからぬ二尺道　風

因糸芋茎風吹き来り　通

喰物と思をきしる芋茎あ　子

吹ぬ紙漉の里　風

裏口に鶯が待細勤すて　通

飯盛山に禅寺ふる　子

探灯のきらく自ら面　風

とれるとるを菜ら投書　通

十十

蕎麦の秋を小虎をいきうれて　子

ようやあれ秋仁まう来て居　風

樹木とも情次きのある善信小家　通

こゆうき雪ら横さ雨と降新　子

別れ端の品ひ中り形迫ひ　風

されてこそも浮ぬ魚住き　通

ちへ中ら入れ是れたる病ン菜　子

地蔵このかゝ墨と見はすく　風

夏ゆゑまれにて有むと用ゐ　通

さらえてほとゝぎす小後を出す　子

草鞋を拵へうけり糸あるり　風

人物もせぬ紙伊領の露　通

ゑえてあほ用も小ぢて蓋造　子

保縫う解ふて乱石を踏む　風

女房と生ぢられ物を　通

見こうまれて融等出す　子

第近そくして　ちゝ市仕舞　風

おキの動作うう今教へ有保　通

又ちも入歯の糸切るり　子

一適まるる姫の影ます　風

ほつくとそはけふ花の格交交　通

日はうはまるまるる春　子